

# 広島部落解放研究所設立三〇周年に寄せて

河野 官

広島部落解放研究所が設立され、十月五日で三十年となった。この機会に三十年を振り返って、人間の尊厳を人類の課題としなくてはならない二十一世紀に貢献する道を共に拓いていきたいと考える。

## (1) 研究所設立まで

広島県における同和教育運動は、県西北部の吉和村立吉和中学校教師による差別授業が契機となった。この差別事件を総括する過程で、学校や社会教育各方面に同和教育の必要性が自覚され、広島県同和教育研究協議会（以下広同教と呼ぶ）が結成された。県教育委員会（以下県教委）主導のもと同志的会員組織として発足したが、何をどのようにすることなのか全くわからないままの状況であった。県内ごく一部の教職員の献身的な取り組みを普遍化することによってこの教育運動は組織的な拡大

りを見せるようになる。特に「広島県東部同和教育推進者研究会」に個人的に結集した実践家は、その理論と方法を高め、県全域に普遍化させる役割を果たした。

やがて東部同和教育推進者研究会は、名称を変えて広島県同和教育推進者研究会（略称広同推）と組織的に発展した。広同推は広同教の内実を発展させる役割を果たしたのみならず、広同推の会員をそのまま「広島部落解放研究所」の会員として研究所の設立を実現したのである。

一九六七年県内で起った府中事件・尾道高校差別アンケート事件をはじめとして、七〇年までの企業による連続就職差別事件に対する差別糾弾闘争を経験し、部落解放運動と同和教育運動の結合をはかることによって、大きく同和教育が県内に広まり、教職員や行政職員に意欲と自信をもたせたとと言える。

研究所の設立には、現在保存されている来賓名簿をみても二三名の記載があり、広同推会員を含めても多数の参加を得て結成されたものであった。

七名の理事と、研究員を歴史部門・経済社会部門・法律部門・運動理論部門・教育部門・行政部門にそれぞれ配置しスタートした。

### (2)第一期としてまとめられる研究所のあゆみ

創設より一九八七年ごろまでおよそ十七年間で第一期としてまとめることができる。主として、門田理事長(所長)の指導力を中心とした研究活動である。各研究員がその役割を果たし、研究・実践内容を現場に返したのみならず、各方面から講師を招き講座を通して研修を高めた。この時期に学んだ者が県内には多く、今も各方面で活躍している。

各市町村から、被差別部落の実態調査や市町村民意調査を委託され、調査・分析・提言を行ったのも七市一七町村にのぼった。

また、亜紀書房から「広島県被差別部落の歴史」と「実践同和教育論」を出版したり、職場研修資料として「学習シリーズ」を順次発刊し二十三号まで継続させ好評を得た。

この期の後半になるにつれ、情性に流れる傾向をうんだ。講座の開催も行事的となり、辛うじて北部一市四郡の実態調査が組織力をあげての活動となった。全員登録と会費納入が確立しなければ組織力は弱体化する。総会もなく役員会運営が決議機関も兼ねていたところに問題があった。

### (3)第二期としてまとめられるあゆみ

研究所が組織機関として機能するためには、会員の登録と自覚が必要であり、組織運営能力を高めることが何より必要である。論議を経て、八九年より門田理事長・本庄所長体制が確立、しかし一年後に門田理事長勇退、その後外林昭仁理事長となる。

まず、研究所会員登録整理を行い、宗教部会・啓発部会・教育部会・歴史部会更に広島という地域課題も含めて国際連帯部会と機構整備を行った。事務局も責任執行体制をつくるべく、事務局員も大巾に増やした。講座は研究所の伝統として五講座継続させた。

研究所であるからには、最底のところでも、所報や研究紀要の発行が求められる。現在、所報も二三号紀要も今回の発行を含めて8号となる。

H市における小中児童生徒の生活と学力実態調査も委

託され、現場教職員と共に、三ヶ年実施し課題を具体的に提示したところである。またS町の町民意識調査も、単発的な意識調査と分析でなく過去二回の調査との比較、しかも、行政の事業や啓発との関連で変化をとらえ課題を提示するといった細やかな分析を行った。尚こうした調査活動は、事後が極めて重要で、研究所として三ヶ年間は、啓発や研修に責任もって対応するものとしてきた。S町の住民学習会二年五七会場に、それぞれ講師団を送ったのはそうした責任ある調査と提言をすることをモットーにしてきたからである。(調査活動が独自に実施できることは第一期に経験し学んだことが活かされた証明でもある)

第一期において好評であった学習シリーズを、装いも新たに「人権学習テキスト」として新刊し、現在一六号まで出版した。

少しでも研究所としての内容を創り出そうと十二名の理事と各研究部会長、そして研究部会を統括する青木理事の努力は着実にのびてきた。

しかし全国的な流れで押し寄せる自由主義・皇国史観の反動的右翼思想が、教育支配として広島にもきびしい歴史をゆがめ、日の丸・君が代の押しつけ命令は辰野教育長と県議や一部ボスをまとめて全国に比をみない程、

激しくまた、悪辣なものである。

こんなとき、反動側がセレモニーを開くことに素早く対応して二倍も三倍もの大々的な活動を展開してきた。正しい歴史観・人権と平和研究集会——歴史的事実を直視して——や思想信条と良心の自由を考える集会——皇国史観の台頭と日の丸・君が代の強制——とテーマを定め大々的な集会を解放同盟県連と共催して成功させたのははじめとして、部落解放と国際連帯研究会・宗教公開講座等々研究所活動の内容を創ってきたところである。

部落解放理事についても、部落問題と穢れ意識——穢れ意識の位置づけを誤らないために——(人権テキストNo.15)や部落差別の本質(会テキストNo.13)のように、理論に裏打ちされた研修を求めて発行を続けた。

また、部落問題を考える現地学習会も全国に場を求めて十回実施し学習を深めてきた。

こうしたひとつひとつの実践を着実に重ねて今年三十年となったのである。

#### (4)第三期に入ろうとしている——今

研究所としての基礎はほぼ整い、いまは、運動を先取りするくらいの研究活動が望まれている。県内各市町村に、いくつかのまとまりをみせて部落解放研究所が単一

体として結成され、それぞれの地域活動を展開し実績を残している。何としても県内のまとまりを強化して全国に発信できるものと今、一〇の研究所が「連絡会」を結成し、研究所活動全領域にわたり連携を強化しているところである。結成二年目に入ったが、研究者合宿研修会も、テーマ別論議を深め、財産を残している。こうした活動は、県内におけるリーダー的存在である者ばかりか、核を養成する意味においても、「理論的水準と人材養成」を高める上に大きな力となる。当研究所においても、歴史部会・教育部会に弱点を持つが、今強い刺激を受け、得るところ大であると考ええる。

##### (5)三十年の節目はスタート

広島における部落解放運動・同和教育運動・教職員組合つぶしをねらう攻勢が強い時、忙しいとか、厳しいからとか、差しつかえたとかを口実として、自分の責務を果さない者が増えてきていないだろうか。「困難を排して先ず参加する」これこそ、研究所をうみ出した先輩たちの運動だった。みんな授業もした。事務も人一倍こなした。しかも旅費の保障も代替えもなく、それでも「教育のまこと」を見つけ出したよろこびと希望を抱いて集った。ちょうど今年の広同教大会のように妨害にあっ

ても集結したように。こうしたパワーと同志を信じながら若干の組織課題を列記してみよう。

先ず第一に、会員の拡充による組織強化である。情勢がきびしいとなげくのでなく、先ず研究所に結集しよう仲間があり、研究資料があり、理論を学べる場がある。

次に、専門部活動の強化（例えば今日的な意味で宗教科部会が一定の役割を果たしているように）である。どんな思想的攻撃や打ち出される反動的施策に対しても、即刻対応し見解を発表できる部会にならなくてはならない。そのためにも、役員・執行部におけるリーダーシップが求められる。深い理論研究と鋭い感性をみがきつつ、ひとりでも多くの後継者を育てるといふ気概がなくてはならない。

最後に研究所の事務所が不便で狭いということもあるが、文献資料その他あらゆる記録をも分類整理し研究者に供応できる体制を早くつくりたい。

いま、事務局員がその分類登録にかかっているとこである。

三十年を決意も新たにスタートの年として心に刻みながら――。